**滝田　十和男（たきた・とわお）**

**１、プロフィール**

歌人。松丘保養園発行の「甲田の裾」、白秋系の「多麿」「形成」に参加。木俣修に師事し中野菊夫、成田小五郎の選歌指導を受ける。歌集『天河』は全国的に注目された。

＜生没＞

1924（大正13）年12月21日　～　2016（平成28）年８月17日

＜代表作＞

歌集『天河』

＜青森との関わり＞

福島県に生れた。昭和12年、父とともに青森県東津軽郡新城村（青森市）にある松丘保養園に入所した。

**２、作家解説**

滝田十和男は、大正13（1924）年福島県に生れた。

父病むが科（とが）あるごとく罵られ川べりに独り笹舟ながす

（歌集『天河』）より

父の病気に対する村人の偏見のために、幼い日は、ひとりさびしく遊び暮らした。10歳の秋に全身、数ヵ所に斑紋の徴候があらわれ、

更衣室に追はれし吾れの利耳(ききみみ)に母の嗚咽は響ききたれり

そして、自分自身と一家をおそった暗影に幼い魂がおびえる日がつづいた。昭和12（1937）年、父とともに青森市の松丘保養園に入所することになり、

とほくゆく癩(なゐ)のからだを憚りて出で立ちをさへ夜半をえらべり

と詠い、父は、母と嬰児にわかれ、父と子は、ふるさととの別れに、筧の冷たく、清らかな水をこころゆくまで飲んだ。入園後、園内の小学校の分校に学ぶ。入園以来臥せりがちであった父は、幾つもの余病に耐えがたく、血を継ぐ者吾れ１人のみの手を握りながら、14年５月10日この世を去った。

ひきよせて吾が頭(づ)抱へて遺しける臨終(いまは)の言葉おろそかならず

（父逝く）

15年尋常科を卒業、16年の春、孤りのさびしさに堪えがたく、園内から脱走。新城中学校へ通学。そして園内のいろいろな作業に従事した。終戦を転機に、松丘保養園の機関誌「甲田の裾」に短歌を発表。北原白秋系の「多麿」に入会、木俣修に師事し、「多麿」解散後は「形成」に参加して積極的に短歌を発表した。22年に滝田知子と結婚。「契り」「受洗」「知子受洗」などの歌を作る。

伊藤整が、評論「療養者の歌と私小説」（「新潮」）で、「これは、この全歌集の中のもっとも痛烈な作品だと言い得ると思う」と絶賛した歌集『天河』の代表作二首。

幼くて癩病む謂れ問ひつめて母を泣かせし夜の天の川

おろそかに生きて来しとは思はぬに無慚な吾れを置きて年ゆく

**３、資料紹介**

〇歌集『天河』

図書

1956（昭和31）年５月５日

180㎜×110㎜

第１歌集。昭和10年以前、父の病気に対する村人の偏見のために、ひとりさびしく遊び暮らした幼い日の思い出から、自らも父と同じ病に冒されてゆくのを知る。成田小五郎が「すぐれた小詩型の上に劇的な半生を見事に描いた」と評したところの世界が詠われている。